

六十四歳。

玉造、紋十郎の他には先に吉田辰五郎、辰造のお山つかひの大立者あり、後には二代目玉造、三代目玉造、吉田多爲藏が、群を抜いて光つてゐた。これ等の人達は或はこれが最後の名人であるかも知れない。

語り手の代表的五名匠

攝津、彌、津、大隅、越路

明治時代を通じて咲き匂うた五名人を花に喩へて見ると、攝津は櫻、彌太夫は梅、津太夫は菊、大隅が桃、越路が紅葉と云ふところであらう。

攝津 大 掾

人なつこい愛嬌のある童顔、長い眉、濡れた眼、それに天稟の品位ある美音が百萬の強敵を

撃ち破つた唯一の武器。

明治十六年文樂座櫓下となり、三十五年九月攝津大掾の號を小松宮殿下より賜り、翌三十六年五月改名披露、大正二年四月引退、此間實に三十年間文樂座の牛耳を執る。

大正六年十月歿、八十二歳の長壽を保ち、晩年は須磨の別荘に風月花情の悠々生活を樂んだ

無二の幸運兒。

天保七年三月順慶町の實家塗物問屋に生る。

兼 津 大 掾

養家は木工職（釣鐘町に在り）。初め三味線弾き後に太夫となり江戸にて修行、天來の美音愈々音曲的になり、大阪に歸來。文樂座出勤（慶應元年）、明治三年早くも切場を語る、昇進頗る早し（三十五歳）。



天運此人に幸ひして、明治初年以來大家續々歿する。十年に春太夫死し、十一年強敵古靱横死、山四郎（山城大掾のこと）死、十六年六代綱太夫歿、住太夫引退、十七年未來の豪敵八代染太夫死、團平引退、十九年五代彌太夫退座。遂に呂、津、時等あるも敵にあらず、越路一

人天下となる。文字、南曲、路、七五三等皆其門下なり。

十八番物は『先代御殿』『中將姫』『酒屋』『新口村』『セツ目おかる』『朝顔宿屋』『十種香』『妹脊山竹雀』晩年聲潤稍衰へたりと雖も、情を語るに傾きて艶消しの美音となる。

人格圓滿濃厚、よく門下を愛し、社交は妻女によつて上流に成功、多くのファンを獲得し、

人氣沸騰前後比なし。

五代 彌太夫

名人長門太夫の秘藏弟子。初め長子太夫、長門の息子と間違はれたことがあるほど、可愛がられた。

大阪幸町に生れ後に北堀江に永住、六七歳頃

より稽古を始め、十歳頃より子供淨瑠璃や首振り芝居の座長として諸國を廻る。明治四年文樂座へ出勤、十九年退座し、二十七年彦六座の後身稻荷座再興について櫛下として勤め、三十二年全く引退。後進の教育、新作、新作曲に没頭した。現在に至る文樂座又は近松座系の太夫三



夫 太 彌

味線の重鎮殆ど皆彌太夫の教へを受く、俗に堀江の大師匠と稱ふ。三十九年十月歿（七十歳）。

中年から悪聲となり、従つて役々の性格を語り分け、人情を語り活かすことに熱中し、世話淨瑠璃を主とし時代物にも別様の寫實味を出す。澁味、寂び、哀愁、悲痛、そして洒落、輕快の藝風。得意物は『大安寺』『道明寺』『忠四』『橋本』『お染久松飯椀』『帶屋』『吃又』『八百屋』『鎌腹』『沼津』『岩井風呂』『赤垣』『逆井村』『四ッ谷』等。

濃厚篤實、謙讓無欲、平民主義（攝津大掾の貴族的なのに比し）、嘘を云はぬ人。文才あり、新作あること別述の如し。

名人團平の評に、攝津を八重櫻の濃艶、彌太夫を山櫻の清楚に譬へ、二者共に文樂の座寶であると。永く因講會長として、斯界雜多の事件を善處し、圓滿公平の解決を見て皆心服す。

十一歳から七十歳の死の直前まで、六十年間の日記が遺つてゐる、丹念に淨瑠璃、劇、社會、風俗の資料など綴つてゐる。

三代 津太夫（後七代綱太夫）

京都烏丸高辻の實家烏松（小鳥屋）に生る。十八歳より修行、明治九年十月文樂座に入る。

攝津の艶物に比し、味の深い世話語りとして名物となる。得意物は、『沼津』『湊町』『忠臣藏四段目』『質店』『酒屋』『兵助』『鰻谷』『堀川』『橋本』。殊に明治初年下阪の際、アテ節の多い『日吉丸三段目』を自暴氣味に語り散らして、而かも勝れた特長を出してこれを流汗させた、『湊町』などと共にすたり物を復活させた功績や大。



温順で上品、それで飄逸な樂天家。滑稽奇才に富んで愛嬌があつた。十八番の日吉丸で『ぼとけ様まで無理いうて』を、かみゆうて、とや太つて大笑ひを買つたのも、平氣で語り終つた吞夫氣さ、樂屋中では綽名を『お公卿様』と擡げた。歌舞伎見物が飯より好きで、批評が奇想天外だつたといふ。

千日前法善寺内の茶店營業、『法善寺』の渾名の生れた所以。

大阪にコレラ流行の時、五代彌太夫は本名傳次郎だから、お公卿様これにからかつて傳染病を利かして『傳ちゃん傳ちゃん』と呼んで盛んに嫌がらせる。奇才では負けてぬ彌太夫が、

今度『源助』といふ流行言葉の出来たとき、お公卿様の本名が櫻井源助だから、すぐに津太夫を呼ぶのに、『源助さん源助さん』と態と仰山らしく云ふので、道がお公卿さんもこれには詫びを入れた。さてもこの頃の文樂の長閑なこと。

大正元年七月廿三日、七十四歳で歿去。

三代 大隅太夫

大阪順慶町木嶋屋と呼ぶ鍛冶職に生る。

八九歳の頃より稽古、明治五年太夫となり主として彦六座系の芝居へ出勤、後ち文樂座に入る。常に頭梁の位置にあり。文樂の攝津、越路等と對立して斯界の覇を稱す。

大正二年七月三十一日臺灣にて客死す（六十歳）。

若年の頃、好男子が累して女色の爲め病を得、瀕死の重體となつたが、快復後顔の醜化したのが却つて發奮の動機となつて、遂に名人の域に達す。中年後の修業の猛烈さ、ちよつと類があるまい。

上品で溫柔な明治時代の名人の中にあつて、これはまた奔放不羈な慧星的一人物。本來淡泊

單純な性質であるに我執が強く、定見のない爲め屢々出所進退を誤つてゐる。數奇な運命に操られて晩年悲惨なる死を遂げるに至るところ、藝術家的天才肌と併せて、客觀的には興趣ある人物。



大 岡 太 夫

見臺を前にしては名人だが、肩衣を脱ぐと殆ど常識が疑はれるほど、一向話にならない、このところ三代越路と似てゐる。嗜好はありさうにも見えぬが、句作もやれば生花の心得もある、謠もうなるがいづれも大序語りといふところ。得意物は『合邦』『志渡寺』『日向嶋』『壺坂』『堀川』『尼ヶ崎』『野崎村』『伊賀越岡崎』『熊谷陣屋』『忠九』

歌舞伎かぶれは大毒だ、といふ見地から芝居を見ることを大禁物としてゐたなど、この人らしい一見識である。

淡々たる中に、山あり川あり花あり鳥あり、一種獨特の寫實表現の妙、天下の一品。大酒大食これまた天下。

三代 越路太夫

堺の八百屋（八百久）に生る。八九歳の頃から、やかまし屋の團七について猛烈な稽古をした。後に攝津大掾の秘藏弟子として愛育され、文樂出勤以來漸次精進して、後年大掾の後を襲

うて櫓下となる。大正十三年三月悪病のため歿。

（六十歳）



越路太夫

奔放な性格で、師の勘當を受けたこと、三十幾回といふほどであつたが、大掾の品格に次第に柔化された傾向があつた。越路のツボラ、は知れ渡つたものだつたが、愛弟子でもあり、有望な藝格を惜しまれるのあまり、仲裁する人さへ

あれば、そこに首が繋がれたのだ。晩年の越路述懐して曰く『私には幾つ首があつても足りなかつたのでした……』

藝風は若年の頃、濫い世話物を得意とし、彌太夫畑と云はれたが、中年から一變して、本來

の滋味へ攝津の艶を加味し、極めて健實な語り風で一家を成し、攝津歿後の文樂を背負つて立つた。

得意物は、『合邦』『太十』『酒屋』『二十四孝勘助内』『寺子屋』『和田合戦市若切腹』『布引鳥羽離宮』『長局』『紙治内』『熊谷陣屋』。修行時代の烈しい稽古は、前述の通り彼れの額に師匠團七に撥で擲られた古疵によつても知られる。

この他、以上五名匠に匹敵する人に、初代豊竹呂太夫、五代竹本組太夫がある。呂太夫は、呂篤と名乗つた素人の出身、明治七年頃から舞臺の人となる。はらはら薬を賣つて居たので通稱『はらはら屋』と呼ばれた。大音強聲で大物を語つた輪畫の太い藝風で名を揚げた。『信仰記是齋屋』『逆櫓』『熊谷陣屋』『志渡寺』『竹中砦』『又助住家』などを得意とした。明治四十年六十五歳で歿、大阪天満の産。

組太夫は京都生れ、明治八年文樂座へ出る。後各座へ轉々して、十七年稻荷彦六座に入る。柳適、大隅と並んでの重鎮、キビキビガツチリした語り風で著名。商賣の豆腐屋であつた頃、トーフートーフーと呼ぶ賣聲が既に太夫聲になつてゐたといふ。太い底力のある豪聲。呂太夫が大海のやうな茫洋とした大音とすれば、組は山鳴りの襲ふやうな壯調、内面的には呂以上だ

つたかも知れぬ。得意物は『伊賀越岡崎』『二代鑑』『阿漕』『熊谷陣屋』『二代鑑』『太十』『御所櫻』など。

後年になつて、文樂では九代染太夫、三代南部太夫、初代七五三太夫、四代津太夫。稻荷座では五代住太夫、新靱太夫、二代春子太夫、伊達太夫（後の土佐）があり、源太夫、つばめ太夫（今の古靱）などが介在した。

三味線では三代豊澤團平、松太郎、重造、絃阿彌、龍助、友治郎、吉兵衛、友松（今の道八）、新左衛門等々。